

'25 福島県現代詩集

福島県現代詩人会

# '25 福島県現代詩集

福島県現代詩人会



赤松幹彦

## 約束の日

一人暮らしの叔母の遺品の中に  
一九五七年三月二十九日

「あなたの声が聞こえない」という走り書きあつた

残雪の上を

吹き渡る三月の風は冷たく

檜の樹の根元に丸く雪は溶け

若草は萌える

ご飯と白菜の漬物

塩引き お味噌汁

ちやぶ台に並べ

私は待った

あなたと私の指を比べたとき

私の指が細く小さいことをあなたは笑つた

あなたの手は浅黒く大きい

人差し指は真っ直ぐ伸びて

中指はさらに大きくたくましい

葉指はあなたがはにかんだときに似ている  
離れた親指と小指が扇のかたちを作り  
二つの扇が重なつたとき  
私たちは一つになつた

十時まで待ち

玄関の鍵をかけ私は床に入った

寝付けぬままにいたとき

激しく玄関を叩く音がした

慌てて引戸を開けると

外は吹雪だつた

会えぬことを悔しいとは思わない

朝の光の中の一面の雪は

新たな春の訪れを告げていた

山の端の向こうに浮かぶ光彩は

朱を含んだ鮮やかさで

私を包んでいる

光の音よ

私のこめかみを打て

真っ直ぐに 優しく

浅井たけの

## 青のいのち

中空も地上も

青一色に包まれて

初夏の萌え立つ光のなかに

精神ごと引き込まれていった

立夏

この季節は

亡き人たちが

夢や現に降り立ってきて

導きと慰めを置いていくから

身と心はそれぞれに

青の中に隠れてしまうのだ

美しさとは

魔性を秘めたもののように

青のいのちが連綿と湧き出るなかで

日毎に花々を生み 開花させ

小さな生き物たちを産み 羽ばたかせ

四方の青は海のごと

そよぐ風に葉波を縦て渡っていく

天地に

土砂降りの喝采を受けた日

青のいのちを貰った

遠い遙かな記憶が

ふいに震えて哭いて

懐古のいのちへと

精神を蘇らせていった

あべ和かこ

## 眠る二人の子ども

ルーベンスの「眠る二人の子ども」

巻き毛を柔らかく枕に遊ばせて

眠る二人の幼子は

温かい寝具に包まれ

また、お互いの温もりも

ふつくらとした薔薇色の頬で

無防備を謳歌する

どの時代にあつても誰もが飽くことなく

そうした幼子の姿に見入つてしまうのは

揺れる心の真ん中に留まつてくれる

そんな世界を求めているからなのだろう

揺らぎない子らの健やかなその生気は

長方形のキャンバスの中に取り込まれ

四百年の時を繋いだ

そして

更なる四百年を繋げる未来は蜃気楼の彼方

闇は光を拒み玉石混濁蠢く中に

新たな宇宙の萌芽を培うはずが

暗闇に閃光が射す地上にあつては

未来を生きる幼子らの眠りは儚く  
無限を旅する夢の続きは何処へゆくのだろう

幼かった我が子らの小さな掌に

緩やかに萎れていた

四つ葉のクローバーの輝きは

子らの瞳に映し出され

今を疑わない高揚した睫毛を

なおさらに活き活きと寿いでいた

そんな

ありふれた小さな日常が

静寂の夜を失った大地にも

確かにあつたはずなのだ

祈りの心で見上げた初冬の夜空には

煌めくきら星の中にひととき大きく木星が輝いていた

古来ラッキースターと呼ばれるこの星は

幸運への明かりを示す「吉星」との

言い伝えがあるときいた

天野行雄

## ボスポラス海峡

舫ちやう

それは海に思いをとどまらせる

最後通牒であろうか

七つの海は

荒くれ者たちの

望郷と冒険の鎖で

離さないから

うん ボスポラス海峡は

遠いよね

どんな悲しみを弔い来て

棹の届かない鎮魂をも

星の運行に照らし合わせて

海に揺蕩い

したたかに酔わせて

舫うのはボクらだ

ボスポラス海峡で

胃の腑に残された

日本人的思考回路は

絞りだされて

係船柱みぎしらが陸の汀と

海の浮気性をはかなみ

忘れないよう

繋ぎとめているのだ

カモメも荒くれ者も

地に足をつける時間は少ない

ボスポラス海峡って

どんなところかな

舫ちやう

小名浜港の遊歩道の木の床を

こつつんこつつん鳴らして

ボクの足は異郷を感じているか

囚われているのか

限りなく物語る波に耳を

預けているとき

ボスポラス海峡なんて

ナンボのもんや

## 五十嵐定幸

### 地球が壊れてしまう

このままで良いのか  
このままで良いのか

このままで進めば地球は壊れてしまう

このままで進めば地球は壊れてしまう

人間の動きを一時止めてゆっくり歩こう

人間の動きを一時止めてゆっくり歩こう

人間の動きを止めた時に次の動きが分かってくる

そこで一歩づつ前に進めば良いのだ

そうして一歩づつ進めば僅かな前進となる

僅かな前進 僅かな前進 僅かな前進

これが地球にやさしい進み方なのです

そうして歩めば地球がのびのび生きられます

そうして歩めば人間の寿命も伸びるのです

人間の動きを今のままのスピードで歩めば

巨大な壁にぶつかって一巻のおわりとなる

岩田武昭

## しあわせのポケットティッシュ

昔もらったポケットティッシュが  
引き出しの奥から出て来た

あの頃はしあわせだったと思う

今はそうでもないと思う

しあわせの定義を再確認したくて

スマホで「しあわせ」を検索してみる

奈良時代はもの事を為すの

「為合わせ」だったそうだ

天が為すことに応じて

し合わせることがしあわせだった

室町時代は人に仕えるに変わって

「仕合わせ」になっている

相手が天から人のする事変わったが

いずれも思わぬことが起こっても

うまく相手にし合わせた状態を

しあわせと言っている

自分の受け止め方で決まるのか

あの駅前でもらった

このポケットティッシュは

あの時うまくし合せられなくて

封を切ったまま

時間が停まっている

ティッシュを一枚取り出して

時間を動かしてみる

これで心の曇りを拭いて

うまくし合わせるのだ

## 星の水たまり

夜空に探す

星の水たまり

そこには

何万年も前の

地球が写っている

## 遠藤 仁

### 村に生きる

その昔、ここは穏やかな村であった

停車場があつて汽車は一日四回運行され

高校生や勤め人で客車は混雑していた

山あいには温泉旅館があつて

観光客たちのカラコロカラコロの下駄の音が通りに響き

目前の岩山の頂上からは

子ども達の「ヤッホー、ヤッホー」の大きな声が聞こえ

緑の大地では大勢の人が汗して働いていた

子ども達は暗くなるまで外で遊び

「早く寄らないと、ご飯無くなるぞ」と

親に言われていた

そして、夏の夜の田んぼには

ピカピカ光る蛍がいっぱい飛び交っていた

でも、今は、あの頃の景色はどこにも見られない

九軒の温泉宿は二軒になり

六千人居た村は二千五百人に減少

爺さんと婆さんが家に籠り

昼間の人影は少なく、犬の鳴き声さえ聞こえない

たまに聞こえるのは

チリンチリンの通学児童のクマ鈴の音  
その学校さえも、もうすぐなくなると言う  
学校のない所に若者は残らない  
村には働く場所もない

田畑はススキやセイタカアワダチソウ、クズが蔓延り

柳の木まで生え荒地と化し

それを良いことに人間様に代わって

サルが、クマが、イノシシが人里に現れ出ている

あの暑くまぶしかった日は落ち

高い空には北の罫に帰るカラスの大群

夕空には一番星が昔のままにはつきりと輝いている

「私の命は先が知れている」

「困難を踏み越える元氣もない」

「私は何もできずにただその時を待っている」

でも、まだまだ「限界」などと決して言うな

私は今、この村の未来に少しでも明るく光り輝くものを

星空を仰ぎながら探し続ける

真っ白な雪が溶けて春になったら

この村の真っ青な空の下

黄色い希望の花をいっぱい咲かせて

村のみんなに元氣を与えよう

いつまでも生き甲斐があつて

人が人として生きられる

穏やかな村であるように

大津恭子

## マツチバコ

箱の中

ひたすら吐き出した言霊を  
並べて眺めているうちに  
いつの間にか  
発火する

生まれて間もなくは  
熱く大きく燃え上がり  
手に負えない  
半刻過ぎれば  
多少の勢いも納まり  
ようやくカタチが現れる  
一刻過ぎるころには  
熱も冷め色も変わる

ここまでくれば  
眼識の乏しき私にも  
美しいか否か  
鋭利か鈍か  
観て触れて確認できる

とりあえず

結果はどうであれ  
自身から零れ落ちた錆なれど  
何かの役には立つだろう  
袂糞も

キセルに詰めれば  
切らした煙草の  
中継ぎぐらいにはなる  
使い方次第  
可能性を零にしては  
勿体無い  
後始末は  
慎重に

一先ず今日も  
布団には  
厠に行つてから  
世話になろう

## 大山いづみ

### 二つの宇宙

日の出が見える高台

朝陽が屈折し表情を変える

手にはカメラ

胸は躍り 足は弾む

長い手脚を伸ばし始める 朝陽

風が連れて来るのは

小鳥の歌声

深い夜から 怒りやざわめきを

かき消すように

夜風に倒され

朝日に起こされる

銀河系と体内の宇宙

覚醒させ煌めかせるのは

夢を話す瞳

星の遊動に気づかされ

手を広げ歓喜する

光に手をかざし

粒子の音に耳を傾け

ゆつくり光の粒を握る

ミクロの世界に走りだす閃光

私の中の宇宙

生かされている

銀河系とのコンタクト

奇跡の糸に繋がれ

誘惑と軌道

夜と朝の境目から

新しい風が生まれ

学びと文明に変化しながら

小田敬二

## プラス1・5度

2015年度のcopp21は

気候危機を防ぐため

産業革命比1・5度に押さえるという

パリ協定を採択した

それでも

グリーンランドや西南極の

氷床の崩壊

永久凍土の急激な融解などは

進んでいるという

この暑さ

この豪雨は どうなっているのか

もう 手遅れかもしれない

## ジエノサイド

ウクライナ3万1千名 ロシア

ガザ3万3千名 イスラエル

ブーチン ネタニヤフ

血にまみれた両首脳 大統領 首相

ジエノサイド

今どき こんな事があっていいのか

おぼら 航

## つづれ織り

人生はつづれ織りのようなもの  
時を経て織りあげられた布が  
航跡のように続いている

人の生にはそれぞれの  
たて糸と横糸があり  
入り組み絡み合っているので  
一つとして同じ布目はない

拙い織り目 幼かった頃  
ゴッホの向日葵のような荒い色使い  
若かった頃の  
無鉄砲な情熱を思い出す

緋色から青へ  
闇雲に駆け抜けた壮年時代  
ややくすんだ色使いへの変貌は  
知命を意識してのことか

糸の特性を見抜き  
熟練工のような技で  
美しく織りあげることなど  
今となつては夢のまた夢

気がつくつと  
紡いだ糸はもう残り少ない  
そろそろ織り仕舞いの準備に  
かからねばならない

閑静な海岸通りの一角  
海の見える部屋の壁に  
私のつづれ織りを掛けたと思う  
そこで香り立つ珈琲を入れよう  
気ままに立ち寄る人の居る幸せ

菊地清寿

## 過ぎ去ったものへ

うっすらと雪が降った

あぶくま高地に点在する古い住い

どの家の灯りも貧しくにぎわいのない所

思い出せるもの

山あいで孤立した断片的なニュースの数々

つかの間の認識の閃きと匂い

闇の中でよろりと触った不思議な感触

詩のことばに刺激され短いトンネルをぬける

失われた時間と遠くなる一方の思考

考え続けてきたものを巡る

その中で起った苦しみも悲しみも笑いも

いつか風雨と雪に流されてしまい

誰れの記憶にも残らない残ってはいない

詩人らの

放棄してきたあるいは発見できなかつた

ことばだけにむかつて

若い眼が見開かれることだろう

例え ひとりぼっちの老人になろうが

なるまいが —— 雪降る冬は

素晴らしい人生において

過ぎ去って

もう二度と戻ってくることはないものを

想起する場となっているだろう

しんしんと雪は降る —— 地球の片隅で

昔と変っていないのだ実のところ

ニンゲンも同様に名前を呼び合い

手書きで生み出され

消しゴムで消し去られた詩のように

死んで行く

いずれ誰れの記憶にも

記録にも失われ過ぎ去った消失となるだろう

過ぎ去ったものへ

死んで行くニンゲンの束

ここからはうすくなる影として見えている

草野恵子

## ゆうがお

ただひたすらに夕景の瞬間をまつ  
あなたの思い

人に知られることなく――

淡いかたちを漂わせ

恥じらうことを恐れながら

一夜のために悠然とやみに扉をひらく

ともしびはかすかに舞いはじめる

ざわめきが彼方へとこだまする

静けさの中で

艶うつくく白が飛沫となつて

誘惑ようわくされた私の部屋

羽根があつたなら

青空のもとへ旅に出れるけど

静寂の宵だけ

ここで咲く事をゆるされてゐるのよ。

でも、大じょうぶよ

風がなぎ倒そうとしても

ここにゐるから。

朝、力尽きてうなだれることも知らず  
小さな記憶が駆け出す

弾り詰めた想いがせつなすぎて

余韻が残骸に姿を変えてゆく

今宵こそ、息ふきかけられるその時を

待ちわびながら

せめて、夕日に手が届きますように

背のびしながら

一途な願いが、私を深く染めてゆく

扉が少しづつ

小さな祈りが幽かすかな匂いと夢ふくらませ

パツと弾ける音と一緒に目がさめた。

大じょうぶよ。

ここにゐるから。

小林真代

## いちじくの木

まだ青い実をこんなにつけているのに  
今年の無花果はもう終わりねと言う

川土手にこんもり育った無花果の木は  
訪れるたび姿を変えて今は十月

大きすぎる葉が垂れて

まだ青い実や熟れすぎて萎んだ実を  
すべて隠して立っている

向こう岸の山はくもった緑色

紅葉の季節をひかえて

あれもやはり何かを隠している山

むかし川に降ったという雨の話を書く

一日花が見えないところに咲いて

見えないところはあかるいだらう

窓をあければ

風の入ってくるほうと

窓に窓が重なるほう

分厚い窓には

折れやすい日差しがあらわ

十月なのに暑いね、と言うと

何か気の利いた返事はある

笑いあうのはよいこと

ゆっくりと知らされる人の死があり

そろりとめぐる風があり

かたちないことばをいくつか

ふたりだけでしずかなお話をした

小さな庭に好きな花を

好きなように咲かせておいて

向こう岸の山と空を眺めて暮らす

あなたは

ここにいちじくの木のあることの

うれしさを隠さない

また来年、採りにいらっしやい

とあなたは言う

石路はまだつほみ

白いほととぎすの咲くひとところは

先日の手紙で教えてもらったから

もうこれ以上語ることがない

斎藤久夫

## ふりつみ ふる記憶の幻影

「僕らが生まれた日の夜は祭りの夜だった」  
たしかに中学生のKは言った 以後

昭和20年3月9日の深夜を僕はそう覚えた

「吉野せい」は同日早朝 磐越東線平駅から  
二十歳の長男に会うのは最後だと思ひ詰め  
会津若松歩兵第29連隊の兵舎に向かつていた  
客車内は 妻子を残し出征する召集兵士らの  
抱えきれない（鉛の心）に充ちていた

母「せい」は兵舎の裏でツトムが投げ下ろして  
くれた白い煙草の箱を拾いあげた  
彼女は旅館の窓に東京の空が紅く

燃えているのを見ていたか？ 福島から2度目  
僕の父もその頃歩兵第29連隊に召集されていた

それから ふりつみふる 29年

昭和49年3月9日帝国軍人小野田寛郎は  
フィリピン・ルバング島で 大戦最後の  
兵役解除命令を 一人 手渡されていた

ふりつみふった南洋の密林 で  
彼はいかなる炎を見つづけていたか？

／刻まれた／幻影と記録／ おなじ頃すでに  
農婦「吉野せい」は戦前戦中戦後を

開墾の農と土とを ひとの見事と詩と真実とを

『涙をたらした神』・一冊に

清冽勁直に書きあげていた

「せい」の左手はまっすぐに海を指さしていた

そうあれから半世紀 銹色の本  
封筒の中に写真と絵とKの便り

二人の子を／一人は腕に抱え／一人は肩に背負い／  
ようやく歩きはじめた頃／／．．．不意に一人の一郎は  
海と空の風になったが／／．．．もうKもいないが

戦後79（素数）年．．． ふりつみ ふる遠い記憶  
沸騰する熱射の夏がすぎてゆく

燃えている祭りの幻影 光とドンと黒雲 夜と朝とを  
振るわず陰影 限りもなく79（素数）年の蟬たちの声よ

\* 昭和50年・大宅壮一ノンフィクション賞

\*\* 1とそれ自身の数でしか割れない自然数

## 質問の時間

どうして、大地が

こんなにも汚れてしまったのか。

だれか、教えてください。

一度、汚したものが

何故、もどおりにはならないのか。

そのわけを、聞かせてください。

大地にひろがった

悲しみをぬぐうにはどうすればよいのか。

だれでもよいので、教えてください。

ひとの手に負えないものを

どうしてひとは作ってしまったのか。

だれか、教えてください。

どうして、強制的に

あの日、わたしたちは避難させられたのか。

そのときの放射線量を、教えてください。

いつになったらふるさとに帰れるのか。

だれか、教えてください。

ひとのこころを踏みにじり

あれほど大きな事故を起こしたのに

だれも責任をとらないのはどうしてか。

だれでもよいので、教えてください。

遊んだら、「片付けをきちんとしなさい」と

こどもはいつも怒られているのに

ちつとも片付けができないのはどうしてなのか。

そのわけを、聞かせてください。

どうして、わたしたちは

こんなにも苦しまなければならぬのか。

だれか、教えてください。

他に、質問はありますか？

さきもり明日香

## かくれんぼ

おかあさん どこにいるの  
声が聞こえるのに

匂いがするの

おかあさんが見つかからない

おかあさん あたしを見つけて

ここにいたのね と言って

あたしを抱いて頬ずりして

そして おはなしをして

おかあさんをさがしているの

だけで見つかからない

おかあさん あたしを見つけて

あたしの心がおくへ行かないように

あたしをつかまえて

## 心残り

友達に戻ろうとあなたが言ったから  
別れても何でもないと思っていた

あなたの暮らす家を知っていたから  
会えなくとも気にしたりはしなかった

月日は流れ

月日は流れ

思い出すこともなくなったころ

別れて数年後に旅立っていたことを知った

最期に会ったのはいつだったろう

あの時言えばよかった

愛していたことを

さとう公子

## 星は観えない

あの日

人工の光が地上から消えた日

空はどこまでも深く黒く静かに

瞬く光は

星 星 星

こんなに星は、輝いていたのだと気づかされた

星は何事もないように

いつもの姿でいつもの時刻に

輝いているだけ

人間は

慌てふためき

ラジヲ、携帯

あらゆる手段を用いて情報を得ようとした

県道12号線は

自動車の列

列 列 列 と

わかる車のライトが等間隔で並んでいる

ライトは風の谷のオウムの眼の様に光

腐海から 逃げのびるために

西に西にと列をなしている

東日本大震災の時 人工の光がない空は

小さな星まで見えた

こんなに星が輝いていたんだよと 星は無言で光る

13年前の星は

何事もなかったように

嘆きもせず 静かな柔らかな光を キラキラと光らせて

私達に暗号として贈ってくれているはずだ

しかし

あの時の星の数は見えない

いや 見ようもしない 人々

星の伝言

「平常時の時ほど あの時を忘れるな」

これから生きる子孫 温暖化に向かう地球

どうするかは 今に生きる者達の役割を考えてと

澤 夏子

## 在りし日を思う

### 遠景

貝殻をそつと耳にあて

目をつむれば

請戸の海が見える

砂浜にポツンと大層立派な神社が建っている。茗野神社だ。茗野神社は津波で流されてしまったが、旧村人達の強い要望で元あった場所に再建された神社だ。昔、ここは簪とした森だった。建立は古く一三〇〇年の歴史を持つ。祀られているのは九柱の神女で、豊漁・豊作の神だと言う。その茗野神社の再建を祝って安波様祭りが執り行われた。

### 安波様祭り

津波で流された社殿が一三年振りに再建され  
神前で安波様祭りが執り行われた。

豊漁と海上の安全を願う浪江請戸の祭りで

社殿では祝詞に続いて雅楽が演奏され

巫女による浦安の舞が奉納された。

境内では集まった人々に厄払いと疫病退治を

願って笛の音に合わせ獅子舞が振る舞われ  
またスイ、スイと掛け声も軽やかに稚児も  
混って古式豊かに早乙の田植踊も披露された。  
祭りを一目見ようと近郷近在から集まった  
約一五〇名の人々から盛んな拍子が送られ  
復興に花が添えられた。  
安波様祭りの復活によりまたひとつ浪江町  
に希望の光が灯った。

高上げされた請戸浜の防波堤に登って周囲を見渡す  
と青い海、砂浜、真新しい茗野神社、変らぬ波音、広  
がる荒野、遠くに震災遺構の旧請戸小学校まで見える。

### 追悼

あれから一三年。高台の防波堤に登って在りし  
日の請戸を偲び、震災後の今を見つめ、御霊の  
安らかな眠りを祈って、海に向かい合掌する。  
請戸の海よ荒れ狂うな 余波波よ鎮まれ 海鳥  
達よ大漁に導く使者となれ 母なる青海に：願  
いは尽きることがない。

鈴木正一

## 渴望

詩の世界

ことばで 思いを告げる  
ことばで 語り合う  
それが 詩の世界

いかに 語らず言外で

いかに 書かずに行間で  
ものを伝えるか

それも 詩の世界

そのものを言わずに

いかに 表現するか  
いかに 連想させるか

それもまた 詩の世界

かいま見た 限りなき

詩の世界

確かなこと そこは  
ひとつの宇宙

## いつの日か

何気なく通り過ぎた

小さな事実

偶然に現れたと思つた

小さな事実

意味も分からず見棄てた

小さな事実

気がつかれず じつとたたずむ

小さな事実

被災からの教訓に そしらぬ顔の

事実のすべて

異空間のふるさとを 復興という

事実のすべて

いつか来た道を たぐりよせる政の

事実のすべて

歴史をつくる 確かな潜勢力の

事実のすべて

被災棄民にできることは

現実を書き留めておくこと

いつの日か 事実の中に潜んでいる

真実を見極めるために

鈴木淑子

ごほうび

金の縁取りに  
バラの花をあしらった皿に  
マロングラッセ いや  
モンブランを載せましょう

きょうは

「生存証明」のために  
郵便局まで歩いて行ってきた  
ごほうびに

清水焼きの  
青い模様の皿には  
シャイン・マスカットを載せましょう  
紅いもみじを一ひら添えて  
冬の初めの  
厳しい夜を予告してくれたから

白い 少し大きめの皿には  
私の 手首を載せましょう  
五本の指を自在に動かして  
もう 私のものでなくなるから

きょうは

私の 九十二歳の誕生日

添田恒夫

## あなたに会いに行く

夏の朝四時に起きて  
あなたに会いに行く

あなたはまだ獣の眠りを  
眠っていることだろう  
学校や何やかやのことで  
泥のように疲れて

朝方まで見ていたテレビの前で  
しどけない姿で  
眠っているかも知れない

わたしはもう二時前から目が覚めて  
まるで海釣りに出かける時のように  
心が急いで仕方がない

那須に眠るあなたに  
わたしは会いに行く

あなたはもう  
かつてのあなたではない  
髪は振り乱れ  
目の下には幾多のしわが刻まれて

那須に着いたなら  
わたしはそつと玄関の鍵を開け  
あなたに近づいて行く  
忍び足で  
老いたゲリラに変身するのだ

するとあなたは夢の中で  
まるでわたしの接近を知っていたかのように  
手を伸べて  
わたしに抱擁をせがむのだ

あの若い頃の  
情熱の強さで

註…那須に山荘を得て十年、妻はまだ少しの仕事が続けている

空野 禪

「友よ」

雨粒がポツン／＼と川に落ちて  
小さな波紋を作るように  
私の心に落ちた雨粒は  
ポツン ポツンと沢山落ちて  
止めどなく広がっていく

やがて海に着くと

涙色の海は

涙の海になつて

私は

放心状態で波に揺られている

ぶかり

ぶかり

目をつむると

いつきに思いが流れ出すから

目をあけて

じいっと天を見る

あおい秋の空に

雲が動いている

思いを空っぽにしたいのに

なんとか心を静めたいのに

涙色の海は

涙の海のうねりになつて

私を揺さ振つてくる

「美しい羽の

アサギマダラになつて旅に出たの？」

「南を目指す渡り鳥になつたの？」

笑い転げた青春の日々は

もう語り合えないね

鳥の声 風のそよぎ 木洩れ日

雨の音や花を見て

静かに心を寄せよう

「ねえ

まだ私とのあれを守れてないよ」

「先に遠い国へ行った人が 寝ている時

足裏をくすぐるって約束だったよね・・」

高木弘之

## 終しまいを仕舞しまう

キミの名を小さく数えて振り返る

出窓から昇る皓月は近い東方、すぐ右の十字架は俺を見下げて光る

寒さむ苦くしくて、寒さむ苦くしくて

これからとこれからを想像するのです

虚ろな脇道が背を向けて、あっちに行けと方向指示器を出し、見ず知らずの道を指すのです

五十年前の彼ら、彼女らは生きていますか

世の常、人は生き物、生があれば死もあるのだろう

人間の重り、鎖をつけ、突き進む

時間を巻き戻し遅らせる

俺は今、確かに生きてはいるのだ

キミの名を呼ぶ、この道にあの道に、あったかも知れず無かったのかも

時薬ときぐすりにしてしまったのか、うわの空、あの緑色のコーヒーカーップ、もちろんだがソーサーも付いていた  
コーヒーは、もう入らない  
なんだかわからない、かゆさがある  
青春のどっかを掻きまわしている

俺が もういいかい と聞くと

過去の詩人が まあだだよ と言ひ

「おまえの詩は読んでいられない」と言う

俺は「詩など、どうでもいい」と言い返すと

詩人は「詩は死」と言い「詩を殺してから来い」と答えた

今、何刻なにどきだろう、日が暮れだした

まだ終しままう訳にはいかない

酒宴がある、今日をぶっ潰す

明日がある、明日が始まるのだ

「終しまい」を「仕舞しまい」に変えていく

高橋美加子

## 風

私の胸には暗い洞がある

発する言葉はすべて

その洞を通過し

変声され

他人の言葉になって出て行く

私は言葉を持たない彷徨い人

杖を突き彷徨う老婆

ふるさとの空はあまりに高く

澄んでいる

白竜が優雅に遊んでいる

天女は羽衣をなびかせて舞いを舞う

風はいつも

宙の蒼に向かって吹いているのに

私は荒野を彷徨う

私が乗る風はまだ来ない

## 謎

ひとつの旅が終わると

新しい階段があらわれる

矢印は下

降りねば

荷解きをする間もなく重くなった鞆を引きずって  
一歩一歩踏みしめる

空はいよいよ高く

青は際立ち

雲は幸福を描いている

降りながら

振り仰ぐ

行きつく先で

私の謎は解けるのか

滝口吉雄

## 閉ざされた春

冬の景色から  
ぬけだせないままの三月

道を失った春は  
藪の中に消えて

その人の気持は  
いつもそこで止まる

時間はどこまで  
取り戻せるのか

尽きる命も

なつかしい春を思い描いたまま

寒い土の中に

埋れてしまうのだろう

竹林征人

## 天皇制と民主主義

日本文化は天皇政治と共に始まった

神道は民の生活習慣の規範でもあり

皇室は途絶える事なく古墳時代から続き

日本の政治・文化の背景になっている

昭和戦前には天皇は宗教的な存在であり現人神だった

絶対主義日本で、日本社会を考察した碩学は

天皇機関説と書いたが検察によって逮捕された

大日本帝国はその総力戦で徹底的に破壊され、殺され

二個の原子爆弾によってとどめを刺されて敗戦した

敗戦後、日本人ではとでもできない国体の改革が

征服者GHQの手で行われた

国家の主権者は天皇から国民へと変る

しかし、日本文化の伝統は脈々と続いた

日本人が生きる事は文化の伝統を守り続けることだ

日本人の生きるパワーは戦後日本経済の

奇跡的な復興をなしとげた

天皇政治社会の元でなくて、戦後社会の元での

日本国民のパワーが、科学の進歩もあって  
貧しい日本から豊かな日本に変えた

しかし、今将来の不安のため

日本社会は人口減少、若者の数の減少という  
深刻な事態を招いている

戦後教育で、日本の民主主義は

疑似民主主義とか転向民主主義と書かれる様に  
伝統を超える力はない

世界はこれから「戦争の時代」に突入するの  
かそれとも抑止力によって「脱戦争の時代」が  
続くのか混沌とすれど

国会の政争や政府のやり方を見ると

日本が国際的に信頼されるようになる事は  
日本人の能力では難しいのかも知れない

二〇二四年の記憶と記録

子供のいない兄弟夫婦の身元引受人を頼まれ  
入居する施設に同行したのは 六年前の夏  
足繁く訪れた部屋で心通わせた ひとときを  
コロナ禍は消し去り老いが義姉に近づく気配に  
ここ数年 体調不良の私の背中を不安にさせた

実の姉妹のように慣れしたしんだ 大切な義姉は  
青葉のきらめきに見送られ 静かに旅立った  
薄化粧された面の前で甥や姪たちは在りし日を思い  
車椅子で寄り添う兄の心根に思いを 駆せながら  
気丈に煽やかに生きた九十五年の生涯を偲んだ  
目に青葉だね 慈しんでくれた人の思いが詰まった  
まだ温かい箱を 大事に抱えて膝の上に乗せ  
先月高校に入学したばかりの孫の千己が 眩いた  
車窓を視める横顔は 昨日より少し大人びて見えた

四十九日忌法要と埋葬の儀は日を改めて  
隣街の歴史ある寺の本堂で 執り行われた  
何かとご教示を頂いてきた御住職の 厳かな  
読経に続き朗々たる声の御詠歌が 響き渡り

その心ある哀切なことばと 抑揚ある調べは  
深く胸に沁み入り 保たれていた思いが溢れ出す

蝉しぐれに包まれた本堂で 新盆法要は営まれた  
すべての儀式の終わりにほっとした 隙間をめぐり  
腰から右脚を駆け抜ける 激しい痛み  
腰盤が 左右に四センチのずれを起こし  
首から仙骨までも微妙にずれていると言う  
とぎれとぎれの思考回路を さまよいながら  
私は生かされる意味のありかを探っていた

陽ざしの眩しさに目覚めると  
季節はいつの間にか もみじ葉に溶け込み  
色鮮やかな赤色に見事染め上げ 光輝いている  
私は日を重ね痛みを遠去けた脚で そろり庭に立ち  
大きな息を吸い込む と心がゆるゆる透けてくる  
施設にひとり残る兄の 頑張る姿と  
近々の検査入院を待つ夫の姿も見える

風もないのにもみじ葉が ひらり一枚  
葉の落ち行く先を 知る人はいない  
得体の知れない何者かに 背中を押され  
私は残生の八十路の坂を ゆっくり歩き出す

田中佑季明

## 飛翔の明日

前に聳えるは

いわきの百名山 水石山

新緑の山の陰影には 山の懐の深さを知る  
蒼空には 欧州印象派達が描くような

白い綿雲が 幾つもの ふんわりと

柔らかに浮かんで のんびり流れている

真昼の 白い半月に 影はない

モディリアーニの細く 長い女の顔が覗く

白日夢か 彷徨える幻想か

遠くに小さく見える橋は

国道49号線 郡山に続く道

矩形のタンクローリー トラックなどが走る

新緑の小高い山が連なる 山桜も見える

手前には 巨大な 高層マンションの壁

生きた町並みが色を添え凹凸に点在する

わたしは 今 大きなガラス窓に照射され

死んで 眩しく生きている

3か月余り足の骨折で古びた高層階に入院

地獄絵さながらの 手術後の苦渋の痛み

要介護5の 年老いた母を残して至極無念

慰藉を 己に言い聞かせ 繰り返すが

焦燥感の連鎖が 冷や汗と共に 肌の流れ

静謐で 空虚な病室 病棟を支配する

精神の弛緩は いつ訪れることだろうか

拳措の 白衣の看護師に

慇懃に挨拶する

長期入院で 辟易

惰弱の魂が横たわる

投薬の幾つもの袋 囚人のような病院食

プラスチックの容器に 無味乾燥に盛られ

白い湯気が立つ 制限付きの食に箸を置く

だが、感謝の心は 忘れまい

消灯夜9時 パタパタと蛍光灯が消された

大部屋に 佻しく車椅子が 置かれている

暗闇に包まれた 重い淀んだ 空気が漂流

軒の合唱に 体をねじり ひとり寝苦しい

退院の日を 呵責と共に 指折り数える

朝焼けの 東の空に

真つ黒な不吉なカラスが 三羽飛んでゆく

蹉跎の明日に あしたは あるのか

飛翔の 明日が 待っているぞよ

二階堂晃子

ヘッドホン

全ての緑が 梅雨を纏っている  
ヘッドホンには戸惑いの声だけが伝わって  
閉め切った静寂の午後

沈黙

涙声

嗚咽

しゃくりあげる

秒針は回る

誰にも 語れなかった屈辱  
どこにも出せなかった恥  
ぼつりぼつりとつぶやき  
こぼし 吐き出し始め  
見えないヘッドホンに心の底を告げる  
胸の底の底  
つぶやき こぼし 吐き出し 告げる  
そして 沈黙 また

声と息遣いだけでつながっている 雨の午後  
抱えきれない傷ついた丸裸の  
吐息を聴く 少ないことばの裏をはかる  
頷く 待つ

答えは見つからない

思っただけを受け止めて

見えない主の胸の底 思い

前を向く刹那を 待つ

と かすかに届く安堵の息づかい

―吐き出したら 楽になりました

これから練習に行きます―

まだ青い時の声 少し声が膨らんだ

―そうね― と送り出す

外したヘッドホン 耳に午後の雨音

## 福西トモ子

### ふる里

ふと 気が付くと

私はいま 人生の晩秋から初冬の季節にいる

すでに両親も亡くなり

兄も姉もアルツハイマーを患い

連れ合いにも先だたれ

思い出が残るふるさとと遠くなつた

思い出のなかの

故郷の町は今頃 えびす講の

売り出しの旗で賑わい

ひょうたんの形をしたプールの周りで

大勢で芋煮もした

伊佐須美神社の森で どんぐりを拾い

流れる清流ではせりを摘み

石鹸にもなるという梔の木の实をとつた

その森は今はややめの園に変わった

この季節になると戦争が終わつたころの

貧しかった暮らしが目に浮かぶ

外の井戸や寒々とした外のトイレ

がたがたと音をたてて開ける引き戸

吹雪の夜など入り込んでくる雪まじりの風

近くに住む姉とふるさとの話をして

あのところを思えば今は天国だと笑う

そして父母の苦勞を思い涙する

その我が家も今はない

思い出のなかのふるさと

思い出のなかで私は母に会う

## 貉の話

二〇二四年の四月

「同じ穴の貉とは見られたくない」と

連立与党の代表が語った

はて、やはりあの穴に住むのは

人間ではなく貉であったかと、

この間わず語りに得心した

貉という言葉は

和名抄（八）に出ているので

この国に古代から住む獣なのだが

貉を見たという話しは聞かない

広辞苑では、貉は狸と混同されているという

狸ならカチカチ山の話でも

信楽焼きの置物でも馴染みは深い

誇張されたふぐりの立ち姿など

ユーモラスで庶民的だ

だが、貉といわれると

穴から出入りして闇のなかを

闇にまぎれて行動する夜行性の獣という

印象が強い、それと同じ穴に住む

と言われたくないというのは

貉ではないと、見せたいからであろう

しかし、その舌の根も乾かぬうちに

代表は、同じ穴に入ってしまった

余りにも見透いた茶番に、笑う気もしないが

貉の穴には裏金をエサにして

稼業と称して世襲で住んでいる

令和の特権階級と錯覚しているが

所詮、走狗に過ぎない

その老獪が、エサは守れ！と、叱咤する

## 松坂佳生

### 手紙

深夜のオリオン座が翼を広げ

流星は南から北東の方角に光のごとく去っていった

来年 私の後期高齢者の仲間になる

今日も午後十一時三〇分頃に就寝した

一回目のトイレは午前二時三〇分頃である

二回目は午前四時近い頃であった

当年の八月下旬午前三時頃である

トイレ後に左右の親指を木製ベッドの足にあたり

巻爪がさらに悪化 負のスパイラルが増幅する

老いが木霊し心身が傷つき折れそうだ

いまだに膿が宿る日々が続いている

その時 ファックスからソプラノの音が響いた

A4用紙に言葉が書かれており 宛先は不明であった

拝啓

当たり前の日々が平和に過ぎて 生きることを

確かめている でもあなた今 心身共にネガティ

ブな方向に向かっている さあ 移り変わる自然

との言葉の対話を思い出しなさい

春は雲雀が口笛をふくと 花が踊り梅・桃・桜

と開花する その春の粒子を人々が五感で知り

手で種を植え 口にはいるものを掬って生きてい

た 線の先には「天飛ぶ」色が広がっている

夏 セミの食事は樹液を食べ生きている 短命

な生命それでも精一杯鳴いて泣いて生きている

宙はいつのまにか「盛夏」の幕が上がっている

秋は 自然の彩が日本の地球を茜・黄・橙色に

染め人間の心の瞳を癒す 今年も収穫祭がくる

生きてきた現実を素敵に染めている

今 初冬「冬青」空が続く 水が一枚一枚と重

なって氷になり 人間の体に傷をつける それで

も厳冬中 先にある希望に向けて生きている さ

あ 心身の病を自然の光と風 そして自分の力で

浄化しなさい あなたなら克服できる 人間はひ

とりでは生きられない あなたも生きることにな

進しなければならぬ

敬具

手紙を読みおえて 当日の午前六時頃に起床する

胸に置いた手紙が溶けて肌着が濡れていた

みうらひろこ

## T 医師への手紙

よくそんなに怒っていられますね  
私とはとくにあきらめて

ふるさとの墓じまいも済ませ

今日はゴルフを楽しんで来ました

私の作品が載った文芸誌を贈った

その返事がT 医師から届いた

お気軽な生き方のようにだが

軽い言葉のうらには

T 医師の苦痛がぎっしりと

単なる一患者にすぎなかった私でも

その苦しみが想像出来た

あの大企業の下請けのそのまた下請け会社に

働いていた作業員たちが

定期的に健康検査に訪れていた町医院

下請けの下請けまではまだましで

孫請けひ孫請けまでつづき

一つの大企業の体制は確立され

その周りは雨後のタケノコのような

関連企業がとりまいていた

農作業の鉞をすて農業から会社員と

呼び名を変えていった人達

防護服に着替え、炬の中に入って

二十分の作業中に限界時間切れの

アラームが鳴ると中断

防護服を脱いで被曝量を計り表に出て

それだけで普通の人が一日働いたと同じ

高賃金を得てパチンコ店に入って

もうけた・損したと一日を終えて

T 医師はそんな作業員が定期検査に訪れる

指定医院の院長で彼等の健康状態を

誰よりも把握していたのだ

「原発ジブシー」とよばれていた人達が

日本中から集まっていたころ

大企業の周辺の小さな町や村の景気は上々

飲食店などホクホク儲けて羽振良く

母ちゃんに隠れて若い姐ちゃんに入れあげて

そんな話しはあちこちに転がっていた

T 先生いつまでも怒っているのは

あの事故をなかつた事にされたくないから

誰かが書かないと消えてしまうから

本当は先生も元患者だった作業員達が

元気にしているのだろうか

とっても気に懸けているんですよね

油井憲一

## 金鷄勲章<sup>きんし</sup>

ばあちゃんは第二次世界大戦で亡くなった息子の命日になると金鷄勲章を仏壇に供えて

ていねいに供養していた

それは俺の親父と二人の叔父の

三つの金鷄勲章だった

人間は本当に悲しいと

そのことは話さないと言うが

ばあちゃんの悲しみはまさにそれだった

親父が最後の動員で出征する時

役場の小使が「赤紙だぞい」と言つて

招集令状を持って来たのを

八十年たった今でも覚えている

だから金鷄勲章を反面教師に

生きてゆかねば―

## さくらんぼ

赤ちゃんが誕生すると

一番最初に口にするのは

ママの胸の二つのさくらんぼだ

幼稚園生になって

初めて五十米走で入賞した時は

ママの元に走つて行つて

真っ先にさわるさくらんぼ

初恋の人の一番最初に

触れたのもさくらんぼの想い出だ

妻へのプロポーズの表現にも

又さくらんぼの記憶がある

今卒寿を迎えて

妻の完熟したさくらんぼに

癒されている

わたなべえいこ

## 夜の沿岸

沼の内諏訪原のバス停は

信号を右に曲がる手前にある

住宅街は左折

直進すると防潮堤へ突きあたる

震災の被害が多くでた場所の

高台にできた公園には

セイダカアワダチ草が伸び

子供の姿を隠している

沿岸沿いには

人気のバーガー屋が出来 いわきの湘南

モデルハウスのような住宅ばかり

サーファーは部屋の中で

魚と一緒に泳いでいる

知人の個展会場

門扉を入るとマールライオン像似の置物が

左右でお出迎え

物価高 年金減少 庶民に関係のない生活が

芝生の向こうにあった

波が攫った時間は遠のいている

夜の沿岸には

防潮堤を越えることも出来ない魂が

新しい住宅の明かりを眺めている

目の前で止まる最終バスを

カーテン越しに見送る

沼の内諏訪原バス停を右に曲がる

乗客になつてゐる自分を思つて

渡辺孝行

イノ「チ。」\*

すべてはまつたくの偶然でしかないようだ  
いまこオレのはじまりも未来も  
必然といえるのは「シ。」だけ

シニタクナイ シナセタクナイ ニゲロ

無知ながらに窮地をしのぐ衆知は  
目的を吹き込まれ 夢と膨らまされて  
さながらビッグバン 孤独への

ヤッパリ ソレハオキテシマッタ

疑いなく外へ向かったはずだったあてさきが  
いつの間に 内へと反転されてしまったのか  
あつたはずの偶然の いのちの軌道

ソノケンリノセンビキニ タタレ

臆面なく一人前の振る舞いするオレも  
なにがしか 一人称のタネをまいた

その責任はあるが 執るフリしかできない

ヨニシルセルモノトボシク モガク

「チ。」はヒトにしかない。ゆえに錯誤し  
稚児の無心にかえつてのみ 正し得ると  
自然の静寂に励まされ いまここ

シラズシラズニ ミチビキアッテ

おはよう いい日和だね  
こんにちは どちらから  
さようなら きつとまた

イノ「チ。」 キミニアエテヨカッタ

\*「チ。」 魚豊 作・画のマンガ作品「チ。」より



「飯館村の食堂のことば」

## 編集後記

古希間じか、期せずして巡り会った方々が、詩との出会いになりました。現代詩人会の入会を許され一年が過ぎ、何故か理事に選出され、今は『県現代詩集』編集委員にもなりました。すべてが初めての経験です。

第一回編集会議は、私はただ頂くだけの参加で、阿吽の呼吸で進みました。自分の不甲斐なさを自覚し、スムーズな役割分担と協力、納得しきりの発言に感心してしまいました。

妻は、いつからか私を「いささか先生」と呼びます。サザエさんの隣人の方です。「いささか先生」の名前は、なんぶつ「難物」とか。わたしは、どんな難物になるのか。

(鈴木 正二)

六年前に編集した時から二十数名も詩人が消えてしまった。何と淋しいことだろう。六年前、次の六年後はどうなるだろうという懸念もあったが、その六年後の今回、こうして皆様の原稿をお預かりして『第四十六集』を編むことが出来たことを喜びたい。

齋藤家に集まったの編集会議は、実に心強いものであった。アンソロジーの創刊号から『通巻四十五集』まで揃っているから。相双地区がこれまで編集してきた表紙等再

確認することが出来てとても参考になった。

例のごとく、原稿の督促数名。六年前にも書いたけれど、年一度の発表の場、その辺のことも、もつと強い意識を持っていただければ……。(みうらひろこ)

庭の先の、南の空につながる堤防の道が舗装されて、散歩する人がふえた。事故前には、就学前の女の子が風を上げた。糸が切れると、川向かいの住宅地に落ちていった。彼女らはもう近くには居ない。

庭の真ん中の通路に敷石が置かれている。実は、土に埋もれていた敷石のことを、数十年間気付かないでいたことがあった。

一月中旬、最後になる作品が届いた。印刷所に向かう前に目を通すと、長年心の奥底に埋もれていた深い思いに触れ、内なるところから表現している作品だった。比喩的な言い方は非礼になるのかも知れないが、何かを確かめるように、庭の敷石を数えながら、土手に上った。

終わりだなど思っただけで安心していたら、「詩祭」、つづいて「詩集編集」をも手伝うことになった。重いキャンバスを運び、(檜)《冬青》の文字も覚えた。最後に、G線上を外れることなく歩めたことを感謝し、また皆様の御健康を祈念します。(齋藤 久夫)

二〇二四年は波乱の年と言えましょう。元旦の能登半島地震は多くの命が犠牲になり、九月には記録的豪雨にも見舞われました。八月には気象庁が「南海トラフ地震臨時情報」を発表。二年連続で「最も暑い夏」は色々な野菜やフルーツにもダメージを与え、物価が上がりました。近くの温泉の牛乳は二十円アップです。

海の温度上昇で台風も多かった年。「令和の米騒動」と言われ店頭からお米が品薄になりました。そんな中、十二月には、核なき世界を訴え続けてきた日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞、波瀾万丈と言える一年に朗報でした。世界中の人にこの切なる思いが浸透してほしいと願うばかりです。

あたり前の日常や思い出、社会情勢や今・・・『福島県現代詩集』には、書く方のそれぞれの思いが詰まっています。私は郵便ポストを覗き、詩集を手にした瞬間から胸がときめきます。(空野 禪)

毎回のことですが、年一回の原稿提出のため走り書きの文字を集めて見ると、自分の日常がいかに言葉をつぐことを忘れているかを痛感し、絶望的な気持ちになります。

それでも凶々しく言葉を連ねて提出するのは、今は亡き若松丈太郎先生の「書き続けなさい」という言葉があるからと自分に言い聞かせています。先生が「核災」と断言した原発事故から十四年。今も自分が書き散らした

言葉の中にはあの時の怒りと悲しみが痛みとなって疼いています。(高橋美加子)

バラの芽が動き始めた2月。水無川河畔に移したふるさと高瀬川のだんぶ(ハマナス)の芽がほちつと赤い。

合唱曲「大地讃歌」作詞の大木惇夫は、生家近くの宿に静養していた詩人である。終戦前後の一年半、浪江町大堀の四季を詠う『山の情報』(原本はネットの古書店より購入していた)。3・11の避難先で脳裏を襲ったのが詩集の大堀風景だった。詩碑の建つ高瀬川渓谷は詩を知り始めスケッチに通った中学時代からの原風景だ。故里喪失でも、故里は詩の中に永遠に残された。広島出身の大木は、原爆投下時に彼の言うみちのくにいたのである。新しい年「土の歌」全7章を聴く。『山の情報』をじっくり見ると、著者筆の表紙が自分の15歳の水彩に似ていて、戦慄した。窪場と石垣とクルミの木、大高倉山。絵を描いた少女の記憶。根っこがあれば大丈夫、と夢見ることが出来る。いのちは、何時だって芽吹く。大木の「だんぶの花」に、言葉の奥に潜む詩の力を思う。(齋藤 和子)

※本年度は歴史ある詩人会の創刊号の色合いにしました。